

浄土真宗の教章

〜私の歩む道〜

真宗のユニーク

藤岡正英

探究社

浄土真宗の教章

—私の歩む道—

宗名 浄土真宗
宗祖 親鸞聖人
(二開山)

宗派 浄土真宗本願寺派
本山 龍谷山 本願寺 (西本願寺)
聖典 阿弥陀如来 (南無阿弥陀仏)

ご誕生 一一七三年五月二十一日
(承安三年四月一日)
ご往生 一二六三年一月十六日
(弘長二年十一月二十八日)

・宗祖 親鸞聖人が著述された
主な聖教『正信念仏偈』(『教
行信証』行卷末の偈文)『浄土
和讃』『高僧和讃』『正像末和
讃』
・中興の祖 蓮如上人のお手紙
『御文章』

教義

生活

宗門

阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることでできる社会の実現に貢献する。

じょう ど しん しゅう せい かつ しん じょう
浄土真宗の生活信条

一、み仏ほとけの誓ちかいを信しんじ 尊とうとい名なをとなえつつ
強つよく明あかるく生いき抜ぬきます

一、み仏ほとけの光ひかりをあおぎ 常つねにわが身みをかえりみて
感かん謝しゃのうちに励はげみます

一、み仏ほとけの教おしえにしたがい 正ただしい道みちを聞ききわけて
まことのみのりをひろめます

一、み仏ほとけの恵めぐみを喜よろこび 互たがいにうやまい助たすけあい
社しゃ会かいのために尽つくします

目次

浄土真宗の教章〔私の歩む道〕	5
真宗のみ教えの特徴	6
真宗のヒント	7
はじめに	8
難信・難解の教え	9
バケモノ屋敷に灯をともし	11
京極に縄張り	13
たしなむ心は他力なり	15
ご正忌躰	15
五島のお寺で	16
おたんやの市止まり	17
念仏者の「お精進」	18
たしなむ心は他力なり	20
門徒物忌み知らず	21

えんぎかつぎ	23
りっぱな宗教、そまつな宗教	24
糸引きのお名号	25
仏法力不可思議	27
二河白道のたとえ	29
他力の信心を護る	33
お盆のいわれ	35
お斎の意味	35
お盆の由来	37
供養の器	40
お盆は聞法のチャンス	41

【付記】

葬儀、法事等の挨拶で、使うべきでない言葉と、ふさわしい言葉
（実際の弔辞から）

じょうどしんしゅうきょうしょう わたし あゆ みち
浄土真宗の教章〔私の歩む道〕

わたし おが ほとけさま ほんぞん
私の拜む仏様【本尊】は「阿弥陀如来」、くわしくは「南無阿弥陀仏」という。
「はかりないいのち（無量寿）」と、きわもない光（無量光）の阿弥陀仏に一心に
きみょう
帰命するものを必ず救う」という意味。

なも あみだぶつ ろくじ みようこう いっさい くだく な しよう
この【南無阿弥陀仏】の六字の名号は、一切の功德にすぐれ、名を称すれば
ねんぶつ かならじょうど でき
（お念仏すれば）必ず浄土に生まれることができるのである。なぜかという、そ
れが阿弥陀の本願に誓われてあるからである。

みだ ほんがん せいがん なか だい
【弥陀の本願】とは、阿弥陀如来の四十八の誓願のことで、その中でも第十八
がん ねんぶつおうじょう がん かなら すすく
願を「念仏往生の願」という。「必ず救う」という弥陀の本願を信じて念仏すれ
ば、誰も必ず救われる。

【宗名】を浄土真宗といい、【宗派】を浄土真宗本願寺派という。

【本山】は龍谷山 本願寺 (西本願寺)

み教えを開かれたご開山 宗祖・親鸞聖人は一一七三年五月二十一日

(承安三年四月一日)ご誕生

一二六三年一月十六日(弘長二年十一月二十八日)ご往生

●詳しくは別掲の「浄土真宗の教章」を参照

真宗のみ教えの特徴

- ① 阿弥陀如来のお独りばたらきで (絶対他力)
- ② どうみても助かりようのない罪の凡夫の私が (悪人正機)
- ③ 本願を信ずるばかりで (信心正因)

- ④ 平生へいせいにおいてお浄土じょうどへ生まれさせて頂くいただ身にさだまる。(|| 平生業成へいせいごうじょう)
- ⑤ そして、報謝ほうしゃのお念仏ねんぶつを申すもう人生じんせいを歩みあゆ(|| 称名報恩しょうみやうほうおん)
- ⑥ 此この世よの縁えんが尽つきるとき、浄土じょうどに生まれうてただちに仏ほとけとならせて頂きいただ(|| 往生おう生即成仏じょうそくじょうぶつ)
- ⑦ 娑婆しゃばに立ち帰かえり、迷まよえる人々ひとびとを救すくうはたらきをする(|| 還相回向げんそうえこう)

真宗しんしゅうのヒント

◆ 「親鸞しんらん聖人しょうにんというお方は、バケモノ屋敷やしきに灯ひをともしられ、京極きょうごくに縄張なわばりをされたようなお方かたである」——と。

◆ 「信しんずるばかりでたすかるぞ」私わたしのものは何なんにもいらぬ。願力がんりきひとつと信しんずる

ばかり。

◆「自力は捨てよ」もろもろの雑行雑修自力の心を振り捨てて、一心に弥陀をたのめ。

はじめに

先年、中外日報社の正月企画で「青少年教化の現状と課題」というテーマで宗派を超えた座談会があり、参加させて頂きました。終わりに際しては「最近の法事に『精進』する家庭が少なくなり、子ども達への影響を心配します」と発言しました。すると、他宗のお坊さんから「真宗には精進はないでしょうが……」といわれ、とっさに反論も出来ず、無念の思いが残りました。

「終日能行すれども、所行海を出でず」——やつてもやつても自分がやったとはいわない。「おかげさままでやらせていただいた」という他力真宗の「生きさま」を、お念仏の先輩方はそれぞれお手本をお示しくださっています。

難信・難解の教え

ご門徒の皆さんに接していて、痛切に感じることはありません。諸賢のお叱りを覚悟の上で、あえて言わせていただければ、浄土真宗とはなんと世間の常識とかけ離れた、頑固で、へそまがりの宗教だろうかということなのです。

枕経では遺体はそつちのけでお仏壇にお参りする。水子供養はしない。『般若心経』は読まない。法事のお経は故人の為に読むのではない。祈りごとや願い事をしない——等など。